

CHOSHI (第5話)

(昭和29年)

かもめの群れが銚子港の上空を飛んでいる。親潮と黒潮がぶつかり合う銚子は東日本最大の水揚げを誇る港町だ。昭和28年に銚子商業が春の甲子園初出場。戦後の復興がすすみ、町は活気に溢れていた。

観音駅から前宿町に向かって坂を登っていくと、野球専用球場『銚子市野球場』がある。来週からそこで『銚子市内小学校野球大会』が行われることになっていた。

海沿いの清水小と明神小が強く銚子駅周辺の商店街に隣接している興野小は清水小や明神小には勝てなかった。小学校の野球大会は全校応援で行われ、銚子の小学校最大の行事だった。

『来週から野球大会ですが、5年生から出場できます。だれか6年生と一緒に練習する人はいませんか？』興野小の5年生の担任はクラスの男子に呼びかけた。『俺、参加します。』下田と小林という男子生徒2名が手を挙げた。

『藤本、お前もやろうよ。お前の球なら、6年生にも通用するよ。』藤本は下田と小林に誘われて放課後の練習に参加した。

練習は6年生中心に行われていた。藤本は練習を見て思った。『これじゃ、本格的な練習をしている清水小や明神小と試合をしたら大差で負けてしまう。』練習は、バッティングになった。『だれか、バッティングピッチャーをしてくれないか。』顧問の先生がそう声をかけた。

『先生、やります。』藤本がマウンドに上がった。はじめは7分程度の力加減で、コントロールを重視して打ちやすい真ん中だけを投げた。『ほうー。藤本君はフォームもきれいだし、コントロールもいい。本気で投げたらどうなんだ？ 本気で投げてみる。』藤本は大きく振りかぶって渾身のストレートを投げた。すると、ボールはうなりをあげてキャッチャーミットに収まった。

『藤本君。速いじゃないか。』よし、今度の大会は藤本君に投げてもらおう。すると、ボールを受けたキャッチャーの6年生が先生を呼んだ。『先生！ 藤本の球は速すぎて捕るのは嫌です。別なポジションにしてください。』

先生は困った顔で『だれか藤本のキャッチャーができる奴はいないか。』と呼びかけた。『俺出来ます。』5年生の下田が手を挙げた。下田はキャッチボールで、ずっと藤本のボールを捕っていた。『よし、今年の大大会のエースは藤本だ。』興野小野球部の新たな歴史の始まりだった。